



## 地域の担い手問題と新規就農者

(社) 北海道地域農業研究所 常務理事 黒澤 不二男

### 一、北海道農業の担い手の状況

先日、二〇〇〇年農林センサスの結果が発表された。その中で注目するのは、担い手のいない農家の割合は七〇%だということ。私どもの研究所の調査の数値とか道農政部企画室の農業経営者に対する意向調査などを見ても、農業後継者がいない割合は七〇%。比較的農業の安定度が高い地区や農業経営形態でも後継者がいない割合は六〇%である。

後継者の確保率は三〇%から四〇%。農林センサスで統計的に明らかになった。地域によって若干状況は違うが、全

体の三割から四割には後継者がいる、それ以外の六割、七割の方は後継者がいない状態で営農を継続しているのである。

#### (1) 主力は五〇才代

今の農業者の世代構成を見ると、主力を担っているのは大体五〇代、地域によっては六〇代、農業の安定度が比較の高い地域は四〇代から五〇代である。後継者の充足率を世代構成で考えると、五年〜一〇年の間には担い手問題は非常にシビアな局面を迎えることになる。北海道農業の課題の一つは、農畜産物の価格問題であるが、その価格問題に対応するためにも担い手がいなければ、ほとんど作戦の立てようがない状況だといえよう。

## (2) 担い手を育てる新しい動き

この情勢の中で、農業者なり地域農業関係機関が手をこまねいてばかりではない。新しい担い手の階層を模索する動きもあり、取り組みの成果が表れている部分も見られる。

例えば、「地域水田農業ビジョン」で検討されている集落営農組織の設立などが、育成すべき担い手確保のための取り組みの主要な対象になっている。

この取り組みは、地域農業をシステム化することによって地域の担い手問題に突破口を見いだそうとするもので、具体的な事例では、空知管内南幌町で近年に大型の稲作の生産法人が連続的にいくつか創設されている。地域農業構造をこの部分を核にして変えていこうという農業者の自主的な動きが表面化したものであり、「地域水田農業ビジョン」にも対応するものと注目を集めている。空知管内ではこれに続くかのように栗山町などでも新しい大規模法人が設立されている。

また、北海道農業会議や北海道農業担い手センターでは、新規就農を希望する人々を北海道に導き入れたい、農業から離れている人々を呼び戻したいといういろいろ取り組んでいる。今農業・農村から離れている人々も、「意向調査結果」等から見ると、農村なり農業経営そのものについて「プラス

の評価」をしている割合が結構高い。取り巻く環境が厳しい状況の中でも「農業はお先真つ暗で絶望だ。」と思っっている人だけではない。むしろ社会経済情勢がシビアになってきて、一般産業の景気動向も冷え込んでいるし、リストラや倒産がどんどん起きている中で、「農業にこそ活路を見出すべきだ。」という動きは、従前とは違う形で、前面に出てきている。

## 二、新規就農者をめぐって

### (1) パートナーの存在

北海道にも、地域で担い手育成に取り組み貢献しているリーダー農業者を公的に認証する「指導農業士制度」がある。その認定には、活発な活動実績、しっかりとした経営内容、地域で高い評価を受ける識見・人格などのハードルがあって、誰でも簡単に認証されるものではない。去る二月中旬に公表された「平成十五年北海道指導農業士（四〇名）」の中に、新規就農して一〇年未満の農業者がいる。この農業者は黒澤隆次氏（六一才）といい、五二歳の時、東京都の一流企業の実務から脱サラをして、北海道に新天地を求め、胆振管内大滝村に就農した。就農してから約九年間、

難しい施設花き専門の経営形態を志向。しかもユリという品目にこだわってチャレンジ、経営を軌道に乗せた。その努力が実を結び地域から推薦を受け、取り組みの実績が素晴らしいと評価されて認定を受けたのである。

この黒澤氏が昨年に「中高年よ、農業に道あり」という本を執筆・刊行した。

近年社会現象として、とかく中高年の自信喪失が問題視されている中で、「中高年だつてやりようによっては、まだまだ道（活路）がある、互いに頑張ろうではないか」ということを、新規就農の自分の体験談を通してアピールする内容であるが、新規就農を志す人にとつても非常に理解しやすいガイダンスとなっており、規則や制度の解説ではなくて、自分が実際に体験したこと、就農する前にやったこと、就農してからの心得、安定期を迎えた農業者としての取り組みの姿勢などを説得力のある表現で書いている。

私の印象に残った部分を紹介すると、「新規就農を中高年で始めることは、『家族離散』の始まりである」という記述があった。それは、どういうことか。例えば、首都圏で急に一家の主が思い立って「農業をやるために北海道に行く」と言っても、子ども達の年代は中高生や大学生だから、多分親について行くとはならないのが普通のケースで、親が就農に情熱を持っていても、子どもは今いるところに残る、

高齢の親も残ると。だから家族がバラバラになって生活するということを受け入れなければならぬと言っている。

これは彼の実体験に基づいてのもので、さらに、子ども、親と別れることがあっても、配偶者（奥さん）と別れたら絶対に農業はできない。」と断言している。

かつて就農して間もない黒澤農場を訪れたことがあったが、ハウス内で日焼け除けの手甲をして作業していた夫人は、「私は来たくなかった。今でも、すぐに帰りたい気持ちです。」と語ってくれた。黒澤氏に最近会ったとき、「奥さんは今は何と言っていますか」と聞いたら「まだ言っていますよ」と笑いながら答えた。しかし、一〇年近く氏の良きパートナーとして経営の安定に尽くしてきたことを考えると、夫人の「本音」は、やはり氏の思いに深く共感・共鳴していることが明白である。夫婦が二人三脚でなければ農業はできないと言うのは、新規就農の場合に限らず、農業をやる上での必要な条件だと再確認させられたのである。

## （２）新規就農を志す人に

農業をやる上で、「私の求める農業像」あるいは「農業経営像」、「農村のイメージ」がハッキリ確定していない人は、就農しても経営を持続・安定化させるのは難しいと考える。

イメージは必ずしも皆同じものでなくても、自分に固有の思い・理想を持っていなければ農業をやっていけない。

例えば私の知っている新規就農者の一人は「農業は私が所属していた組織・社会のように、何でもお金だ。」と言わなくてもいいところに、その良さがある。だから農業をやりたいのだ」という考えを持っている。別の一人は、サラリーマン時代の年収が一、〇〇〇万円近くあったのが、しかし北海道で農したら年収が四〇〇万円程度になった。それでも、「かつての世界より、今の方が私の望む理想像だ。」と言っている。

だがそういう考えは、みんな共通かというところ、そうではない。農業だから所得が低くていいとは思っていない。農業こそアイディアと腕と戦略で高い所得を得ることができると。その可能性に賭けているという人もいる。それぞれのスタイルにあった農業経営を展開するべきで、漫然と農業をやってみたいとか、単純なあこがれだけで、周到な準備がない就農は定着するのはかなり難しいことではなからうか。

先日、後志管内のある農業研修会のあと、出席者と懇談する機会があった。その中に知人で新規就農した四〇代の夫婦（脱サラ組）がいた。彼らが語ってくれたのは、「私達が農業経営をやっているのは、地域の人たちが迎え入

れてくれた。受け入れてくれたからで、そのあとサポーターしてくれたから今の経営がある。」先ほどの例のように、他人に頭を下げたり、お金、お金と言っている物質万能なものでないから農業をやるといのは一つの考え方であるが、しかし、農業は没社会・他人と没交渉でやれるかという絶対そうではないことは明らかである。「コミュニティの一員として隣近所との付き合いはむろんのこと、農協で資金を借りるときも、普及センターからの指導・助言を受けるときも、頭を下げてこそ相手からのサポートが得られる訳で、人間と接触する必要がない、自分だけで勝手にやっていけると勘違いする人がいて、地域・集落から異物が入ったような受け取られ方をし結果的に集落にうまく溶け込めずに離脱するケースが結構ある。

私の知人夫婦は、大変地域の方々に可愛がられているとこのことで、地域の人々も、違った分野から来て、違った価値観を持ち、違った情報ネットワークを持っている彼ら自身たちの仲間に受け入れることによって、その地域が刺激を受け、新しい風が起ることを期待していると語ってくれた。このように、新規就農者と既存の農業者との間に互恵的な関係が成り立つことが望ましい状態ではなからうか。数は決して多いとは言えないが、地域農業変革の契機として期待したいものである。